『昭和25年、悪役令嬢は日本を滅ぼしたい。』

―転生先は異世界ではなく、朝鮮戦争直前の日本でした―

第三話　戦争まであと一か月

※

銀座で食べたプリンの甘さが、まだ舌の奥に残っている。

美璃亜はKの執務机の前に立ったまま、言った。

「一か月後――朝鮮戦争、始まるで」

雨音が、窓を細かく叩いていた。

Kは動かなかった。

黒い眼帯。

山高帽。

黒いモーニング。

その右脚には義足。

どう見ても悪の秘密結社の首領だったが、返ってきた声は驚くほど冷静だった。

「……朝鮮半島で？」

「せや」

「何月何日だ」

「六月二十五日」

「北と南が？」

「北が南へ攻め込む」

Kの残った左目が細くなった。

「情報源は」

「……」

「美璃亜」

「その前に聞いてええ？」

「何だ」

「笑わん？」

「内容による」

「怒らん？」

「内容による」

「医者呼ばん？」

「内容による」

「全部内容によるやん」

「早く言え」

　美璃亜は一度、大きく息を吸った。
「私な」
「うむ」
「二〇二二年から来てん」
　沈黙。
　雨だけが鳴っている。
「……」
「七十二年後」
「……」
「未来から」
「……」
「来ました」
　Kは無言で机の呼び鈴へ手を伸ばした。
「待て待て待て待て！！」
「医者を呼ぶ」
「やっぱりやん！」
「当然だ」
「嘘ちゃうねん！」
「意識を失ったあと、突然言葉遣いが変わり、自分を未来人だと言い始めた十九歳の娘を見て、医者を呼ばない父親がいるか？」
「説明だけ聞いたらめちゃくちゃまともやな、おっさん！」
「私は最初からまともだ」
「その格好で言う！？」
　Kは自分の山高帽をちらりと見た。
「服装は関係ない」
「あるわ！」
　美璃亜は額を押さえた。
　あかん。
　完全に頭を打った娘扱いされている。
　そらそうや。
普通に十九歳をやっていた娘が、昏睡から目覚めた途端に大阪弁を喋り、
『七十二年後から来ました』
　である。
　私でも医者呼ぶ。
「……ほな証明する」

「どうやって」
「六月二十五日」
「一か月待てと？」
「北朝鮮が三十八度線越えて南へ攻め込む」
　Kは椅子へ深く腰を下ろした。
「三十八度線付近での衝突なら、今に始まった話ではない」
「うん」
「南北ともに互いを正統政府と主張している。緊張もある」
「うん」
「だが、それと全面戦争は別だ」
「……」
「北が本格的に南へ侵攻する？」
「する」
「一か月後に？」
「する」
「あり得んな」
　美璃亜の眉がぴくっと動いた。
「……言うたな」
「何を」
「六月二十五日のおっさんの顔」
「意味が分からん」
「私は分かる」
「未来人だからか」
「せや！」
「まだ言うか」
　Kは机の上で指を組んだ。
「お前が言うように、仮に北が全面侵攻したとしても――」
「おっ」
「それで直ちにアメリカ軍が大規模に介入するとは限らん」
　美璃亜が黙った。
「米軍の主力は昨年、朝鮮半島から撤退している。残っているのは顧問団が中心だ」
「うん」
「アメリカにとって日本が重要なのは分かる。日本を共産圏へ渡す気もないだろう」
「そこは私もそう思う」
「だが朝鮮半島は別だ」

　Kは机上の地図へ目を落とした。
「海を隔てている」
　指先が朝鮮半島から日本列島へ動く。
「北が南へ攻め込んだからといって、日本そのものが直ちに侵攻されるわけではない」
「うん」
「まして日本に駐留している進駐軍を引き抜き、朝鮮へ送り込む？」
　Kは鼻で笑った。
「考えにくい」
　美璃亜はじっとKを見た。
「出すで」
「何？」
「日本におる米軍」
「……」
「朝鮮に送る」
　Kの表情が止まった。
「米地上軍を？」
「せや」
「日本から？」
「せや」
「朝鮮のために？」
「せや」
「……」
「しかも結構急いで」
「……美璃亜」
「何」
「医者を呼んでいいか」
「まだ早い！！」
　Kは深く息を吐いた。
「お前の話では――」
　指を一本立てる。
「六月二十五日、北が南へ全面侵攻」
　二本目。
「その後、アメリカが介入」
　三本目。
「日本にいる進駐軍まで朝鮮へ投入する」

「そう」
「そして？」
「南は最初、めっちゃ押されてフルボッコ」
「……」
「ソウルも落ちる」
「いつだ」
「すぐ」
「すぐ？」
「すぐ」
「もういい」
「まだあるで」
「聞きたくない」
「なんでや！」
「妄想が具体的すぎる」
「未来や言うてるやん……」
Kは片手で眼帯のあたりを押さえた。
美璃亜は、机に広げられた地図を見る。
朝鮮半島。
北。
南。
その向こうに、日本。
「でもさ」
「何だ」
「おっさん、日本抹殺したいんやろ？」
「そうだ」
「ほんなら北がそのまま南まで取ったら、都合ええんちゃうん？」
「……」
「半島ぜんぶ赤くなって、日本のすぐ横まで共産圏やろ？」
「それがどうした」
「どうしたって……日本ヤバいやん」
「勘違いするな、美璃亜」
Kの声が低くなった。
「私は、日本を共産圏に渡したくないなどと、一度も言っていない」
「……」
美璃亜が目を瞬く。

「日本を抹殺するのは――私だ」
「そこなん！？」
「問題は別にある」
　Kは朝鮮半島へ指を置いた。
「仮に共産圏が半島全域を支配したとする」
「うん」
「その時、アメリカは日本をどうする」
「……」
　美璃亜は地図を見る。
　朝鮮半島。
　海。
　日本列島。
「あ」
「分かったか」
「日本……もっと手放されへんようになる？」
「そうだ」
「基地置いて」
「既にある」
「もっと使って」
「あり得る」
「金も入れて」
「その可能性は高まる」
「日本をもっと強くする」
「そうなる」
　Kの指が、日本列島の上で止まった。
「それでは日本を抹殺するどころか――」
「強化することになる」
「そういうことだ」
「……」
　美璃亜は腕を組んだ。
「めっちゃややこしいな、日本抹殺」
「国家を滅ぼすとは、そういうものだ」
「悪役令嬢ラノベで聞く台詞ちゃうねん」
「何の話だ」
「こっちの話」

　美璃亜は、もう一度地図を見る。
「北がそのまま押し切っても、日本が要る」
「アメリカにとってはな」
「逆にアメリカが入って南を支えても、日本が要る」
「後方拠点として利用される可能性は高い」
「……」
　美璃亜の指が、日本列島の上で止まった。
「どっち転んでも、ここにアメリカの金落ちるやん」
　Kは何も答えなかった。
　美璃亜は地図を見つめた。
　北。
　南。
　日本。
　そして、その外側。
「待って」
「何だ」
「ほな――」
　美璃亜の顔が変わった。
「勝敗なんか、いじらんでええやん」
　Kの左目が細くなる。
「何？」
「北を勝たせる必要もない。南を勝たせる必要もない」
「続けろ」
「戦争そのものなんか、私らでコントロールでけへんやろ」
「当然だ」
「せやけど」
　美璃亜は、朝鮮半島ではなく、その周囲へ指を走らせた。
　日本。
　海。
　太平洋。
　その向こう。
「金の流れは、先回りできる」
「……」
「六月二十五日に戦争は始まる」
「お前の未来ではな」

「アメリカは介入する」
「それもお前の未来では、だ」
「日本におる米軍まで動く」
「……」
「ほんなら、絶対足らんようになる」
「何がだ」
「何でも」
「何でもでは分からん」
「工場。修理。輸送。倉庫。食いもん。医療品.....」
　美璃亜は指を折っていく。
「それと、人」
「人？」
「運転する人。直す人。運ぶ人。通訳も要るやろ」
　詳しい数字は知らない。
　どの会社が、どれだけ儲けるのかも知らない。
　けれど。
　結果だけは知っている。
「朝鮮特需」
「何だ、それは」
「未来の言葉」
「便利だな、未来は」
「茶化すな！」
　美璃亜は机を指で叩いた。
「敗戦でボロボロの日本に、アメリカの金がドバッと入る」
「それで日本経済が立ち直る、と？」
「そう」
「……」
「でも、その金」
　美璃亜は日本列島の上へ置いた指を、横へ滑らせた。
「日本まで届く前に、横からかっさらったらええねん」
「……」
「米軍が欲しがるもんを、日本企業より先にNOCが押さえる」
「どこでだ」
「世界中」
「簡単に言うな」

「NOC、世界中に会社あるんやろ？」
「ある」
「船も？」
「ある」
「飛行機も？」
「ある」
「工場も？」
「ある」
「倉庫も？」
「ある」
「ほな使えるやん」
「それだけでは物は動かん」
「細かい話は後！」
「一番重要な話だ」
「私は方向の話してんねん！」
美璃亜は地図を叩いた。
「朝鮮戦争は止めへん」
「止められん、だろう」
「そうとも言う！」
「……」
「そもそも勝敗には触らん」
「では何をする」
「アメリカが落とすドルだけ見る」
Kが黙った。
「日本へ落ちるはずの金を」
美璃亜は自分の方へ指を引いた。
「NOCが取る」
「……」
「戦争の勝敗やなくて」
美璃亜は笑った。
「戦争の後ろを取るねん」
Kの表情から、少しだけ呆れが消えた。
「後ろ？」
「物流。修理。食料。医療。倉庫。人」
「……」

「日本が戦争特需で復活するんやったら」
　美璃亜は指を一本立てた。
「その特需を、日本に渡さん」
「……」
「一セントも」
　Kの左目が、美璃亜を見据えた。
　先ほどまでの、
『医者を呼ぶべきか』
　という目ではなかった。
「つまり」
　Kが言う。
「アメリカが日本へ落とすはずの需要を、NOCが外から奪う」
「そう」
「日本企業が受けるはずの契約を」
「先に取る」
「日本の工場へ行くはずの仕事を」
「NOCの工場へ」
「日本の運送会社へ行くはずの仕事を」
「NOCへ」
「日本が受け取るはずのドルを」
　美璃亜は笑った。
「横から、かっさらう」
　しばらく。
　雨音だけが続いた。
「……輝に何を吹き込まれた」
「なんでキラ様出てくんねん！！」
「今日、銀行へ行っただろう」
「プリン食べただけや！」
「銀座にも行ったそうだな」
「なんで知ってんねん！」
「雪姫から報告を受けた」
「あいつ！！」
「帰ってきた途端、戦争需要と日本経済の話だ」
「キラ様から聞いてへん！」
「では誰から聞いた」

「未来！」
「そこへ戻るのか」
「そこから来てんねん！！」
Kはため息をついた。
「ならば一つ教えておく」
「何」
「朝鮮半島に、現在NOCの拠点はない」
「……え？」
「倉庫もない」
「うん」
「現地法人もない」
「……うん？」
「港湾拠点も航空拠点もない」
「……」
「まとまった人員も置いていない」
「ちょっと待って」
「ハバロフスクからは撤収した。上海も同様だ。ワルシャワも縮小中」
「待って待って」
「現在の重点地域はインド、フィリピン、インドシナ方面だ」
「……」
「どうした」
「何もないやん！！」
「だから、お前の案は馬鹿げている」
「鬼！」
「事実だ」
「いや……」
美璃亜は積み上がった現実を想像した。
未来知識。
秘密結社。
巨大企業。
世界各地の拠点。
ここまで揃っていて。
朝鮮半島には何もない。
「……さすが悪の軍団長や」
「首領だ」

「そこ訂正すんの！？」
　だが、美璃亜はすぐに顔を上げた。
「でも待って……」
「何だ」
「別に朝鮮に会社作らんでもええねん」
　Kの眉がわずかに動いた。
「続けろ」
「さっき言うたやろ」
「何を」
「客は、韓国ちゃう」
　一拍。
　美璃亜は地図の外側を指した。
「アメリカや」
　Kの目が変わった。
「朝鮮半島に何もないんやったら、外から持っていけばええ」
「簡単に言う」
「飛行機も船も倉庫も、世界中にあるんやろ？」
「ある」
「工場」
「ある」
「修理設備」
「ある」
「食料」
「扱っている」
「医療用品」
「扱っている」
「ほな全部使えるやん」
「契約は」
「知らん」
「輸送経路は」
「知らん」
「為替」
「知らん」
「保険」
「知らん」

「許認可」
「知らん！」
「……」
「知らんから、お前らがおるんやろ！！」
Kは呆れた顔をした。
「開き直ったな」
「私は未来の社長ちゃうねん」
「未来人なのだろう」
「保育士や！！」
「……」
「私は、来月何が要るようになるかは分かる」
美璃亜は自分の胸を指した。
「でも、それをどう集めるとか、どう売るとかは分からん」
「威張るな」
「せやから」
少しだけ声を落とした。
「一回だけ、私を信じて」
Kは答えなかった。
「六月二十五日まで」
「……」
「外れたら医者でも何でも行く」
「当然だ」
「大阪弁の治療とか言うなよ」
「検討する」
「やめろ！」
「それで、当たったら？」
「私の話、ちゃんと聞く」
美璃亜はにっこり笑った。
「な？　お父様♡」
Kの顔が露骨に険しくなった。
「その呼び方をする時のお前は信用ならん」
「なんでやねん！！」
「昔からそうだ」
「こっちの私、何してたん！？」
Kは答えなかった。

代わりに机の脇へ手を伸ばした。

どさっ。

「……何それ」

「資料だ」

さらに。

どさっ。

「ちょ」

さらに。

どさっ。

「待って」

最後にもう一冊。

どん。

「待て言うてるやろ！！」

「尹雪姫。財務、法務、海外契約」

一冊目。

「林麗華。生産、工場、修理能力」

二冊目。

「イザベル・デ・ラ・クルス。海外拠点、人員、現地ネットワーク」

三冊目。

「ヴィヴィアン・ブラックウッド。航空、海運、軍需、調達、情報」

四冊目。

美璃亜は紙の塔を見上げた。

「……これ」

「読め」

「いつまでに」

「明朝九時」

「鬼！！」

一拍。

「いや……さすが悪の軍団長や……」

「首領だ」

「分かったって！」

「四人には九時に会議室へ来るよう伝える」

「ほな、おっさんも九時な」

「私は行かん」

「……は？」

「出席しない」
「いやいやいや」
「お前の提案だ」
「いやいやいやいや」
「お前が説明しろ」
「はあああああ！？」
Kは何事もなかったように別の書類を開いた。
「ちょ、おっさん！」
「何だ」
「私、経済知らんで！」
「読め」
「為替も知らん！」
「読め」
「信用状って何！？」
「調べろ」
「英語いっぱいある！」
「輝に聞け」
「キラ様を宿題に巻き込むな！」
「なら自分で読め」
「鬼！」
「聞いた」
「悪の軍団長！」
「首領だ」
「めんどくさいな！！」
Kはもう美璃亜を見ていなかった。
「六月二十五日までだ」
「……」
「全面戦争にはならんと私は見ている」
「うん」
「ましてアメリカが、進駐軍を朝鮮へ投入するなど考えにくい」
「うん」
「だが」
ペン先が止まった。
「もし本当に起きるのなら」
Kが美璃亜を真正面から見た。

「準備を始めるのは、起きてからでは遅い」
　美璃亜も黙った。
「……せやろ」
「だから一か月だけ与える」
「お」
「好きに準備しろ」
「おお！」
「ただし予算には限度がある」
「悪の組織やのに！？」
「組織にも予算はある」
「夢ないな！」
「現実だ」
　美璃亜は四冊をどうにか抱え上げた。
「うわ、重っ……」
「持って帰れ」
「未来人にこれ持たす？」
「未来人なら何とかしろ」
「未来人に腕力ボーナスないねん！！」
　扉へ向かう。
　一冊がずれた。
「うわ、ちょ……」
　膝で押さえる。
　美璃亜は振り返った。
「ほんまに明日来えへんの？」
「行かん」
「……鬼」
「閉めていけ」
「六月二十五日になったら絶対言うからな」
「何をだ」
「『ほらな？』って」
「帰れ」
「覚えとけよ！」
　美璃亜は尻で扉を押し開けた。
「美璃亜」
「何！」

Kは机に座ったままだった。
「一つだけ」
「うん」
「お前の言う通り、米軍まで動くほどの戦争になるのなら――」
Kは地図へ目を落とす。
「一か月は、長くない」
美璃亜の顔から少しだけ笑みが消えた。
「……分かってる」
扉を閉めた。
長い廊下。
腕の中には四人分の報告書。
一番上の資料を少し開く。
数字。
表。
英語。
為替。
航空機。
船舶。
「……」
閉じた。
「異世界転生って」
美璃亜はぼそっと呟いた。
「もっとチートで楽するもんちゃうん？」

※

自室へ戻るころには、美璃亜の腕は完全に死んでいた。
「……重っ」
四冊の報告書を机へ置く。
どん。
分厚い紙の束が、重たい音を立てた。
「未来人に紙四冊持たすなや……」
腕をぶらぶら振る。
銀座から戻って、そのままKの執務室へ直行した。
雨に濡れたドレスも、まだ着たままだ。
裾を見る。
「……もうええわ、これ」

「お召し替えになられますか？」
　後ろに控えていた侍女が尋ねた。
「うん。なんか楽なんない？」
「楽なもの、でございますか」
「寝巻きほどダラけてなくて、ドレスほど膀胱を敵視してないやつ」
「……」
「その顔やめて」
　侍女が衣装棚を開く。
　何着か確認したあと、白いブラウスと濃紺のパンツを取り出した。
「こちらはいかがでしょう」
「ズボンあるやん！」
　美璃亜の顔が明るくなる。
「乗馬用でございます」
「……馬？」
「はい」
　受け取って広げる。
　腰から腿には少し余裕があり、膝から下は細く絞られている。
　いわゆる乗馬用のブリーチズだった。
「こっちの私、ほんまに馬乗ってたんやな」
「よくお乗りでした」
「へえ……」
　昨日、ガレージでIndian Chiefを見た時のことを思い出す。
　馬。
　大型バイク。
「まあ似たようなもんか」
「……？」
「何でもない」
　しばらくして。
　美璃亜は白いブラウスに濃紺の乗馬用パンツ、細い革ベルトという格好で机へ戻ってきた。
　袖は肘までまくった。
　髪も簡単にまとめる。
「これやこれ」
「お気に召しましたか？」
「めっちゃ楽」
「乗馬はなさらないのですか？」

「今から？」
「はい」
　窓の外では、まだ雨が降っている。
「せえへんわ！」
「では、なぜ乗馬服を」
「勉強するから」
「……」
「ドレスで信用状とか読めるか」
「衣服と信用状の理解に相関があるとは存じませんでした」
「この家の人、たまに雪姫さんみたいなこと言うな」
　侍女には意味が分からなかったらしい。
　美璃亜は椅子へ腰を下ろした。
　一冊目。
《尹　雪姫》
《財務・法務・海外契約》
「……よし」
　開く。
　数字。
　英語。
　また数字。
　表。
　略号。
　知らない銀行名。
　知らない港。
　見たことのない通貨。
「……」
　一枚めくる。
　もっと増えた。
「……よしちゃうわ」
　閉じた。
　腹が鳴った。
　ぐぅ。
「……」
　時計を見る。
「晩飯食べてへんやん」

「はい」
「おったん！？」
　侍女は普通に後ろに立っていた。
「銀座からお戻りになって、そのまま首領のお部屋へ向かわれましたので」
「プリン食べただけや……」
「存じております」
「なんで？」
「雪姫様より」
「あいつ全世界に報告してへんやろな」
「軽いものをお持ちいたしましょうか？」
「お願い。めっちゃお願い」
　十分ほどして、侍女が銀の盆を持って戻ってきた。
　小さく切り分けられたサンドイッチ。
　卵。
　きゅうり。
　薄いハム。
　それに紅茶。
「神」
「はい？」
「ありがとう言うた」
「神、と仰いました」
「聞こえてるやん」
　盆が机へ置かれる。
　美璃亜はすぐにサンドイッチへ手を伸ばした。
　すると。
「……」
　侍女が帰らない。
「何？」
「いえ」
「……」
「……」
「朝のやつ？」
　侍女の目がわずかに輝いた。
「何のことでしょう」
「絶対それやん」

「何のことでしょう」
「二回言うた」
　美璃亜は卵サンドを持ち上げた。
「分かった分かった」
　反対の手で、小さく指を作る。
「一緒にやるで」
「萌え萌え――」
　侍女も素早く同じ形を作った。
「きゅん♡」
「……」
「……」
　美璃亜は食べた。
「うま」
　侍女が満足そうに頷く。
「効果がございましたね」
「絶対パン作った人の力や」
「萌え萌えきゅんの力では？」
「昭和二十五年に変な文化根付かせんといて」
「お嬢様がお始めになったのですが」
「正論やめて」
　コンコン。
　扉が鳴った。
「はい」
　侍女が応じる。
「尹です」
　美璃亜がサンドイッチを咥えたまま顔を上げた。
「雪姫さん？」
　扉が開いた。
　黒いパンツスーツ。
　白いシャツ。
　鮮やかな赤のベスト。
　昼間とほとんど変わらない格好の雪姫が立っている。
「失礼いたします」
「んぐ」
　美璃亜は慌ててサンドイッチを飲み込んだ。

「こんな時間にどしたん？」
　雪姫は机の上を見る。
　四冊の資料。
　紅茶。
　サンドイッチ。
　乗馬服姿の美璃亜。
「……」
「何その間」
「随分とおくつろぎですね」
「これでも仕事中や！」
「まだ四ページしか開かれていないようですが」
「なんで分かんねん！」
「折り目が」
「怖っ」
　侍女が一礼する。
「では、私は失礼いたします」
「あ、ありがとな」
「はい」
　扉の前で、侍女が振り返った。
　両手を小さく胸元へ。
「萌え萌え、きゅん♡」
「もう帰れ！！」
　ぱたん。
　扉が閉まった。
　雪姫は黙っていた。
「……」
「何？」
「先ほどのものは」
「忘れて」
「承知しました」
「ほんまに忘れて」
「善処いたします」
「覚える気やん！」
　雪姫は美璃亜の向かいへ椅子を置いた。
「首領より申しつけられました」

「おっさん？」
「はい。『必要であれば資料を説明してやれ』と」
「……」
　美璃亜は少し黙った。
「意外と優しいやん」
「続きがございます」
「嫌な予感する」
「『一人で読ませれば、朝までに最初の一冊も終わらんだろう』と」
「余計な一言ついてる！！」
「私も同感です」
「雪姫さんまで！」
「さらに」
「まだあるん！？」
「頭痛、吐き気、眩暈、記憶の混乱、その他不可解な言動が確認された場合、医師を呼ぶようにと」
「不可解な言動って何！」
　雪姫が閉じた扉を見る。
「萌え萌えきゅん、などでしょうか」
「違うわ！！　あれは未来の文化や！」
「やはり医師を.....」
「座れ！！」
　雪姫は何事もなかったように腰を下ろした。
「それで」
「ん？」
「どこまで理解されましたか」
　美璃亜は報告書を見る。
「タイトル」
「……」
「そこだけ」
「以前の美璃亜様は、もう少し理解されていました」
　美璃亜の手が止まった。
「……こっちの私？」
「はい」
「頭よかったん？」
「少なくとも信用状を見て、三分間沈黙はなさいませんでした」

「腹立つなァ！」
　雪姫は資料を手元へ引いた。
「では、本当に基礎から始めます」
「お願いします、先生」
「私は教師ではございません」
「社会科の授業頼むわ」
「今から行うのは財務です」
「全部学校の勉強に見えるねん」
　雪姫は一枚目を開いた。
「まずNOCは、一つの会社だけで全てを行っているわけではございません」
「うん」
「各国に系列会社、提携企業、倉庫会社、船会社、商社、加工場があります」
「悪の総合商社やな」
「表向きは普通の企業です」
「裏向きは？」
「NOCです」
「説明になってへん！」
　雪姫は無視した。
「たとえば、フィリピンで購入した物資を別の地域へ運ぶ場合」
「うん」
「現地企業が調達し、船会社が輸送し、倉庫会社が保管し、販売先との契約を別会社が結ぶこともあります」
「一社で全部やらへんの？」
「国境を越える取引は、その方が都合がよい場合があります」
「税金とか？」
「税、法規制、通貨、輸出入許可、保険、現地の商習慣――様々です」
「……」
「その顔は何でしょう」
「急に大人の話になった」
「二十九歳だったのでは？」
「保育士や言うてるやろ！」
　雪姫が一枚の書類を指す。
「そして、こちらが信用状です」
「出た。キラ様のやつ」
「その呼び方はおやめください」

「ほな何なん？」
「ごく簡単に申し上げます」
　雪姫は紙の余白へ、二つの丸を書いた。
「物を売る者」
「うん」
「物を買う者」
「うん」
「遠い国の相手へ、高価な物を渡す時に問題になるのは何だと思われますか」
「金払ってくれるか分からん」
「はい」
「逆に買う側は、金払ったのに物来んかもしれん」
「その通りです」
「ほな銀行が間に入る？」
　雪姫が少しだけ顔を上げた。
「理解は早いですね」
「キラ様がおるからな」
「関係ございません」
「褒めてくれてもええやん」
「銀行が一定の条件を満たした取引について支払いを保証する。それが基本的な考え方です」
「なるほど」
　美璃亜はサンドイッチを一口食べる。
「つまり」
「はい」
「知らん国の知らん会社に『絶対払うから信じて♡』言われても無理やから」
「はい」
「銀行に『こいつ払います』って言わせる」
「非常に乱暴ですが、おおむね」
「分かった！」
「では船荷証券は？」
「……」
「美璃亜様？」
「今日はここまでで」
「始まって十分です」
「先生厳しい！」
「教師ではありません」

　雪姫は次の資料を開いた。
「美璃亜様が考えておられる朝鮮での需要をNOCが取るのであれば、こうした仕組みは避けて通れません」
　美璃亜の顔から少し笑いが消える。
「やっぱそうなる？」
「飛行機を集めろ、船を出せ、物を運べ――命令だけなら容易です」
「うん」
「ですが、それを誰が所有し、誰が契約し、どこの港から出し、誰が代金を支払い、どの銀行を通すのか」
「……」
「そこまで決まって、初めて物は動きます」
　美璃亜は机に頬杖をついた。
「戦争って、兵器だけちゃうねんな」
「当然です」
「ゲームやったら弾薬拾って持ってくだけやったけど」
「何のお話ですか」
「未来の軍事教養」
「医師を呼びましょうか？」
「FPSや！！」
　雪姫は机上地図を自分の方へ引き寄せた。
「首領がお話しした通り、現在NOCは朝鮮半島への投資を優先しておりません」
「なんで？」
「理由はいくつかございます」
　雪姫の指が北へ動く。
「まず北には朝鮮民主主義人民共和国」
　次に南。
「南には大韓民国」
「うん」
「双方が朝鮮半島全体について、自らを正統な政府としています」
「それはおっさんから聞いた」
「三十八度線周辺では、既に武力衝突も起きています」
「でも全面戦争になるとは思ってへん」
「少なくとも、首領はそう判断しています」
「雪姫さんは？」
　雪姫の指が止まった。
「緊張は高いと思っています」

「戦争は？」
「可能性がないとは申しません」
「お」
「しかし」
　雪姫は美璃亜を見る。
「一か月後の六月二十五日に、北側が全面侵攻を開始する」
「うん」
「米国が介入し」
「うん」
「さらに日本に駐留する地上部隊まで投入する」
「うん」
「そこまで断言されれば」
　一拍。
「私も首領と同じ判断をいたします」
「何」
「医師を呼びます」
「雪姫さあああん！！」
「合理的です」
「未来では全部起きるんや！」
「でしたら六月二十五日に確認できます」
「冷静やなァ！」
「財務担当ですので」
「関係ある！？」
　雪姫は地図へ視線を戻した。
「ただし」
「ん？」
「首領が美璃亜様に一か月を与えた理由は理解できます」
「信じてへんのに？」
「信じていないからです」
「？」
「もし何も起きなければ、一部の準備費用を失うだけで済みます」
「あ」
「ですが」
　雪姫の指が日本列島へ移った。
「もし本当に米軍が動くほどの戦争が起きるのであれば」

日本。

フィリピン。

東南アジア。

太平洋。

各地を指がつないでいく。

「現在世界各地に分散しているNOCの船舶、航空機、倉庫、工場、人員を、一か月後に突然集めることはできません」

「……」

「だから今夜から調べる」

「はい」

「何が使えて」

「はい」

「何が使えへんか」

「はい」

「何を止めて、何をこっちへ回すか」

「その判断を明朝、なさるのでしょう？」

「……私が？」

「美璃亜様が」

「おっさんちゃうん？」

「首領は出席されません」

「ほんまに来えへんのかあいつ！！」

「先ほど聞かれたのでは？」

「二回聞いたら変わるかな思って！」

「変わりません」

美璃亜は頭を抱えた。

その横で雪姫が次の報告書を手に取った。

「それでは」

「まだやるん？」

「当然です」

「もう信用状分かったで？」

「基礎の一項目です」

「……」

雪姫が資料末尾の一覧を開く。

《NOC主要運用資産》

《航空輸送》

《船舶》
《修理施設》
　《海外倉庫》
　美璃亜の目が止まった。
「……飛行機？」
「はい」
「これ飛行機何機あるん？」
「ここには資産区分しか記載しておりません。機種と稼働状況はヴィヴィアンの報告書です」
「どれ？」
「四冊目です」
　美璃亜は一番下の分厚いファイルを見る。
「……」
　手を伸ばす。
　雪姫がその手を止めた。
「まだです」
「なんで！」
「基礎が先です」
「ゲームで新しい武器見つけた子供みたいになってるやん私！」
「.....二十九歳だったのでは？」
「だから保育士や！！」
　雪姫は淡々と一冊目を開き直した。
「では次に、船荷証券です」
「まだ銀行の話すんの！？」
「戦争を始める前に、書類を覚えてください」
「私が始めるんちゃうわ！！」
　外では、まだ雨が降っていた。
　机の上ではサンドイッチが一つ減り、資料は一ページずつ増えていく。

※

　時計の針が、十一時を回った。
「……」
　美璃亜は船荷証券を見つめていた。
　見つめているだけだった。
「美璃亜様」
「はい」
「こちらには何が記載されていますか」

「……船」
「船ではございません」
「荷物」
「もう少し頑張ってください」
「もう無理や！」
　美璃亜は机へ突っ伏した。
　信用状。
　船荷証券。
　為替。
　保険。
　輸出許可。
　輸入許可。
　知らん銀行。
　知らん港。
　知らん会社。
　知らん通貨。
「戦争より書類の方が強いやん……」
「戦争をするためにも書類は必要です」
「私が戦争するんちゃう！」
「先ほども聞きました」
　雪姫は淡々と頁をめくった。
　美璃亜は頬を机につけたまま、紙面を見る。
　英文が並んでいる。
「……長い」
「何がです？」
「英語」
　雪姫の指が止まった。
「美璃亜様」
「何」
「以前は、この程度の英文を読むのに苦労されておりませんでした」
「……」
　美璃亜がゆっくり顔を上げた。
「こっちの私？」
「はい」
「英語できたん？」

「できます」
「どれぐらい？」
「日常会話で困られることはございませんでした。契約書も、ご自身で目を通しておられました」
「……ペラペラやん」
「はい」
「十九歳の私、スペック高ない？」
「ご本人ですが」
「中身ちゃうねん！」
　雪姫は少しだけ美璃亜を見つめた。
「言葉遣いも変わり」
「うん」
「記憶にも混乱があり」
「うん」
「英語も不自由になられた」
「不自由言うな。多少は分かる」
「さらに、未来文化や未来軍事教養という、不可解な発言も増えています」
「……」
「やはり脳に何らかの――」
「障害ちゃうわ！！」
「まだ何も申しておりません」
「顔が言うてた！」
「首領が医師を気にされる理由は理解できます」
「おっさんの味方すんな！」
　雪姫は何事もなかったように頁へ戻った。
「では続けます」
「切り替え早っ」
「こちらが港湾関係です」
「港？」
　美璃亜が少し起き上がった。
「船あるんやろ？　港着けて荷物降ろしたら終わりちゃうん？」
「終わりません」
「即答！？」
「港湾使用の契約が必要になる場合があります」
「……」

「接岸」
「うん」
「荷役」
「うん」
「倉庫」
「うん」
「燃料、水、修理」
「まだあるん？」
「検疫や通関もございます」
「……」
　美璃亜は再び机へ沈んだ。
「船って海走るだけちゃうん……」
「陸へ荷物を下ろさなければ意味がございません」
「そらそうやけど……」
「飛行機も同じです」
　美璃亜の耳が反応した。
「飛行機？」
「急に顔を上げましたね」
「飛行機は好き」
「存じませんでした」
「未来ではな」
「……」
　雪姫はもう突っ込まなかった。
「航空機を所有しているからといって、好きな場所へ飛ばせるわけではございません」
「滑走路あったら降りたらええやん」
「勝手に？」
「……」
「他国の飛行場へ？」
「……」
「大型輸送機を？」
「……あかん？」
「駄目です」
「ですよねェ〜」
　雪姫は指を折った。
「飛行場の使用契約」

「うん」
「着陸許可」
「うん」
「駐機場所」
「うん」
「給油」
「うん」
「荷役」
「うん」
「整備設備」
「うん……」
「現地での保安」
「まだあるん！？」
「当然です」
　美璃亜は頭を抱えた。
「ゲームやったら滑走路見えたら降りて終わりやぞ！」
「GAME？」
「遊び」
「航空機を使った？」
「戦車もある」
「……」
「船もあるし、兵隊もある」
　雪姫の眉がわずかに動いた。
「Kriegsspiel？」
「へ？」
「ドイツ式の兵棋演習でしょうか」
「ああ、ちゃうちゃう」
「では？」
「テレビゲーム」
「テレビジョンを用いた遊戯ですか？」
「そう。画面見ながら飛行機飛ばしたり、戦車乗ったり、撃ったりする」
「……」
「何その顔」
「兵棋演習を、遊戯として……」
　雪姫は少しだけ考えた。

「いわゆる未来人は、変わっておられるのですね」
「その『いわゆる』絶対信じてへんやろ」
「はい」
「即答すな！！」
　美璃亜は頬杖をついた。
「でもまあ……」
「？」
「ゲームって結局、軍人将棋とかチェスみたいなもんやったんやな」
「と、申しますと？」
「盤の上しか見えてへん」
　美璃亜は報告書を指で叩いた。
「飛行機がおる」
「はい」
「戦車がおる」
「はい」
「兵隊がおる」
「はい」
「それ動かしたらゲームになる」
「兵棋演習も、その考え方に近い部分はございます」
「でも現実は」
　美璃亜は机に散らばった書類を見る。
　銀行。
　契約。
　保険。
　港。
　倉庫。
　飛行場。
　整備。
「駒を盤の上に置くまでに、こんだけ要るんやろ？」
「そうです」
「……」
　美璃亜は少し黙った。
「盤の外の方がデカいやん」
　雪姫が、ほんの少しだけ口元を緩めた。
「現実ですので」

「ゲームって優しいな……」
「遊戯ですから」
「War ThunderもDCS Worldも、そこまで請求書出してこんかったわ」
「……また新しい単語が増えましたね」
「飛行機のゲーム」
「先ほどの兵棋演習とは違うのですか」
「ちゃうねんて！」
　雪姫は四冊目の報告書へ手を伸ばした。
　美璃亜の目が輝く。
「それ！」
「ヴィヴィアンの報告書です」
「見せて！」
「急に元気ですね」
「船荷証券より飛行機の方が好きや！」
「でしょうね」
　黒い表紙。
《VIVIAN BLACKWOOD》
　その下に、英文で部門名が並んでいる。
《AVIATION》
《SHIPPING》
《PROCUREMENT》
《INTELLIGENCE》
「……」
　美璃亜は顔を近づけた。
「このぐらいは読める」
「安心いたしました」
「馬鹿にしてる？」
「しておりません」
「絶対してる」
　頁を開く。
　そこには機種名と数字、登録地、系列会社、整備状況が細かく並んでいた。
「……うわ」
「どうされました？」
「飛行機いっぱいおる」
「航空部門ですので」

「NOC、航空会社なん？」
「航空会社も保有しております」
「船会社も？」
「ございます」
「倉庫会社も？」
「ございます」
「工場も？」
「ございます」
「何でも屋やん」
「その認識で結構です」
　美璃亜の指が止まった。
《DOUGLAS C-47 SKYTRAIN》
「あ」
「ご存じですか」
「これ見たことある」
「実機を？」
「画面で」
「……」
「DCS World」
「先ほどの遊戯ですね」
「そうそう」
　美璃亜は少し嬉しそうに紙面を見る。
「C-47やろ。輸送機」
「はい」
「こういうの好き」
「何故です？」
「なんか地味やけど働いてる感あるやん」
「随分と曖昧ですね」
「戦闘機みたいにキラキラしてへんのがええねん」
　さらに頁をめくる。
　次の機種。
《CURTISS C-46 COMMANDO》
「……C-46」
「こちらも？」
「名前は聞いたことある」

「ゲームで？」
「これは……触った記憶ないな」
　美璃亜は英文を追う。
「でも輸送機やんな？」
「はい」
「いっぱいあるん？」
「系列企業、関連会社、長期管理契約機を合わせますと――」
　雪姫が数字を確認する。
「およそ二百機」
「……」
　美璃亜が顔を上げた。
「二百？」
「前後です」
「めっちゃあるやん！！」
「すべて飛行可能とは申しておりません」
「……」
　美璃亜の笑顔が止まった。
「嫌な言い方したな」
「事実です」
　頁を追う。
　整備中。
　長期保管。
　部品待ち。
　エンジン交換。
　契約運航中。
　登録変更待ち。
「……」
「美璃亜様？」
「墓場みたいやな」
「失礼な」
「飛べるん何機？」
「即時運航可能な機体は――」
　雪姫が一覧を確認する。
「九十七」
「半分寝てるやん！！」

「『寝ている』という表現は適切ではありません」
「起こせる？」
「何をです？」
「寝てるやつ」
「……」
「一か月ある」
　雪姫が美璃亜を見る。
「整備員が必要です」
「集める」
「部品」
「集める」
「操縦士」
「集める」
「飛行場の使用契約」
「取る」
「登録と運航許可」
「取る」
「保険」
「……取る」
「契約運航中の機体もございます」
「……」
「現在使用中のものを勝手に持ってくることはできません」
「そこ雪姫さん頼む」
「結局そうなりますか」
「知らんからお前らがおる！」
「首領にも同じことを仰ったのでしょう」
「なんで分かんねん！」
「容易に想像できます」
　美璃亜は鉛筆を取った。
　ノートへ書く。
《C-46　約200》
《すぐ飛ぶ　97》
《寝てるやつ起こす》
　雪姫が覗く。
「……」

「何」
「麗華がご覧になったら怒ると思います」
「なんで？」
「『寝てるやつ』では整備状況が分かりません」
「明日、麗華さんにちゃんと直してもらう」
「林は文章校正係ではございません」
「チームワークや！」
「便利な言葉ですね」
さらに頁をめくる。
C-47。
C-46。
少数の大型四発輸送機。
そして、その後ろには必ず別の欄が並んでいた。
操縦士。
整備員。
予備部品。
燃料契約。
飛行場。
倉庫。
通信。
「……」
美璃亜の鉛筆が止まる。
「雪姫さん」
「はい」
「ちょっと分かってきた」
「何がでしょう」
「飛行機二百機持ってても、二百機分の仕事できるわけちゃうねんな」
「当然です」
「飛べる機体が要る」
「はい」
「飛ばす人」
「はい」
「直す人」
「はい」
「燃料」

「はい」
「部品」
「はい」
「降りる飛行場」
「はい」
「そこ使う契約」
「はい」
「荷物降ろす人」
「はい」
「そこから運ぶトラック」
「はい」
「倉庫」
「はい」
「通信」
「はい」
「……」
　美璃亜はノートへ順番に書いた。
《飛行機》
《操縦する人》
《直す人》
《燃料》
《部品》
《飛行場》
《飛行場の契約》
《トラック》
《倉庫》
《通信》
　少し考える。
《通訳》
　さらに。
《地図》
　雪姫が見る。
「地図も？」
「知らん土地行くんやろ？」
「はい」

「現地の人と話すんやろ？」
「はい」
「ほな地図と通訳要るやん」
「その通りです」
「……」
美璃亜はノートを見た。
戦車も。
戦闘機も。
銃も。
まだ一つも書いていない。
「戦争って」
「はい」
「ほんまに兵器だけちゃうねんな」
「ようやく理解されましたか」
「War Thunderやったら壊れても次の試合には直ってんのにな」
「誰が直すのですか」
「ゲームが」
「現実では？」
「人」
「はい」
「DCSやったら滑走路選んだらそこから始まる」
「現実では？」
「契約」
「はい」
「船も港着いたら終わり」
「現実では？」
「荷役、倉庫、通関……」
「はい」
「……」
美璃亜は深く息を吐いた。
「雪姫先生」
「教師ではありません」
「現実、クソめんどくさいな」
「それも先ほど聞きました」
時計が十二時を回った。

　美璃亜が時計を見る。
「……日付変わった」
「はい」
「明日の九時まで？」
「本日の九時までです」
「その言い方やめて！！」
　あと九時間。
　睡眠時間を引けば――
「寝れる？」
「進捗次第です」
「寝かせて」
「まだヴィヴィアンの報告書も途中です」
「鬼！」
「それも何度目でしょう」
　雪姫が次の頁へ手を伸ばした。
「続いて、船舶運用」
「うっ」
「修理施設」
「ううっ」
「海外倉庫」
「ううううっ」
「軍需調達」
「……」
　美璃亜の目が動いた。
「今なんて？」
「軍需調達です」
「そこ先見よ」
「まだです」
「なんで！」
「順番です」
「ちょっとだけ！」
「駄目です」
「見るだけ！」
「駄目です」
「雪姫さん！」

「駄目です」
「三回言うた！」
　美璃亜がヴィヴィアンのファイルへ手を伸ばす。
　雪姫が押さえる。
「美璃亜様」
「一枚！」
「子供ですか」
「保育士や！」
「余計に駄目です」
「何でやねん！」
　揉み合いになった拍子に、一枚の紙が少しずれた。
　英文が覗いた。
《3.5-INCH ROCKET LAUNCHER M20》
「……」
　美璃亜の動きが止まった。
「美璃亜様？」
「……M20？」
　雪姫も紙を見る。
「ご存じなのですか？」
　美璃亜は英文を凝視した。
「スーパーバズーカ……？」
　その下。
《V. BLACKWOOD》
「……」
　美璃亜はゆっくり雪姫を見る。
「雪姫さん」
「はい」
「ヴィヴィアンって人」
「はい」
「何持ってんねん」
　雪姫は紙を元の位置へ戻した。
「明日、ご本人にお尋ねください」
「今見せて！」
「まだです」
「なんで！」

「船舶運用が先です」

「そこに戻るんかあああ！！」

午前零時七分。

美璃亜の徹夜は、まだ始まったばかりだった。

※